

# アトリエ 琉游舎 だより 175号

アトリエ琉游舎 [ryuyusha.com/](http://ryuyusha.com/)

2024年3月27日発行

琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mvsite-3>

桜の花が咲くと人々は酒をぶらさげたり団子をたべて花の下を歩いて絶景だの春ラレマレだのと浮かれて陽気になりますが、これは嘘です。

- 坂口安吾の短編小説「桜の杜の満開の下」の冒頭です。この段落の最後のフレーズは「桜の林の花の下に人の姿がなければ怖いばかりです」となります。山賊と、妖しく美しい残酷な女との幻想的な怪奇物語の始まりです。桜の花の下はまた狂気も呼びおこすようです。
- この時期は世の中桜だらけになりますが、人が桜に浮かれるばかりになったのはいつ頃からでしょうか。西行が「願はくは花の下にて春死なむ その如月の望月のころ」と読んだように、また梶井基次郎が「桜の樹の下には屍体が埋まつてゐる！」と語ったように、桜の木の下には死のイメージもまた広がっています。爛漫と咲く花と短い花のいのち、生死不二。
- 日本ではヤマザクラ、カスミザクラ、オオシマザクラ、エドヒガン、ミヤマザクラ、クマノザクラなどの10種を基本にして、変種を合わせると100種以上の桜が自生していると言われていますが、花見と言えば江戸末期に交配して作り出されたソメイヨシノの並木の下で行われることがほとんどでしょう。桜の開花宣言はソメイヨシノの開花の知らせですが、最近では早咲きの河津桜や身延山のしだれ桜の満開の様子もテレビではよく紹介されています。
- 日本人は桜が大好きな民族のようです。これほど開花時期や満開の様子が報道される国はないでしょう。ただ桜が私たちの目にとまり、口の端に上るのは3月から4月にかけての約1ヶ月間だけのようです。満開に熱狂する1週間を終え、花が散った後は葉桜となり9月過ぎると紅葉もそこそこに落ち葉となって枯れ木の様です。誰にも注目されなくて過ごす11ヶ月と熱狂の1週間の極端な落差が、桜への格別の愛着をもたらしているのかも知れません。
- いつもの桜と共に琉游舎も7回目の桜を迎えます。満開の桜と短い花のいのちに合掌。

## 3月・4月スケジュール

| 3月   |                     |    | 木                   | 金               | 土  | 日                  |
|------|---------------------|----|---------------------|-----------------|----|--------------------|
| 月    | 火                   | 水  | 28                  | 29              | 30 | 31                 |
| 4月1日 | 2                   | 3  | 4<br>映画会<br>13時半から  | 5<br>映画会<br>お休み | 6  | 7<br>写経会<br>13時半から |
| 8    | 9<br>読書会<br>13時半から  | 10 | 11<br>映画会<br>13時半から | 12              | 13 | 14                 |
| 15   | 16                  | 17 | 18<br>映画会<br>お休み    | 19              | 20 | 21                 |
| 22   | 23<br>読書会<br>13時半から | 24 | 25<br>映画会<br>お休み    | 26              | 27 | 28                 |

読書会  
4/9・23  
(火) 13時半

写経会  
4/7 (日)  
13時半から

映画会  
3/28・4/11  
(木) 13時半

先日身延山にお参りに行ってまいりました。前回はそろそろコロナ禍も収束に向かう一昨年の7月、七面山への登詣も兼ねての参詣でした。梅雨明けのとても蒸し暑い日で途中蛭に血を吸われ、暑さに疲労がたまり七面山奥の院まではなんとかたどり着きましたが、山頂行は断念しました。今回はその年の晩秋に発病し緊急手術を受けてから初めての参詣となります。一刻を争う手術を施され九死に一生を得たのも、日頃からの信心と法華経のご加護のお陰だったと考えることもできますが、信心が足らなかったから発病したのであり、生還後は一層の信心に励まなければと考えることもできます。信心の功德はどちらにも取ることはできますが、信心ひとつで体のありようが根本的に変わることはないでしょう。しかし心持ち次第で、体のありようもそれに随ってくると考えれば何事もプラス思考に考えた方が安らぎの処に近づくのではないのでしょうか。そこでわたしは死の淵からの生還は信心のお陰と信じて、遅ればせながらの身延山へお礼参りです。

ところが、わざわざお礼参りと気張らなくても身延山は以前と変わらぬ様で私を迎えてくれました。身延山が、以前のようにいつものようにありのままの姿で私を迎えてくれたのは、信心が私のありようを変えたのではなく、信心が私をありのままの私でいること望んでいるからだったのです。私の心の持ちようと体の状態が変わると私が勝手に思い込んでいたようですが、殊更に発病前と発病後を信心と関係づける必要はまったくありませんでした。自然や建物や僧侶や仏像など身延山を形作る森羅万象は少しずつ時の流れに随って存在の姿を変えているはずですが、身延山久遠寺の三門や本堂、祭られている本尊や日蓮聖人像のありようが変わることはありません。物理的な変化は時がしからしめるものですが、「信（教え）」は常住普遍ありのままに「在る」ことを、身延山は改めて私に教えてくれました。私たちの日常は諸行無常、諸法無我と心得ていても、日々をありのままに観てありのままに過ごすことの困難さにかまけて、「信」を朝勤や法要などの形式に還元することだけで良しとしてしまっていることが私の毎日だったのではないかと、身延山は私に教えてくれました。「信」は何かのためでも、誰かのためでもなく、何かをもたらずとも、何かを奪うこともなく、身延山がそこにあるようにただそこに「在る」こと、それが「信（教え）」なのです。

身延山の三門と本堂を一直線に結ぶ急勾配の287段の石段は菩提梯と名づけられています。菩提梯とは「覚りに至る階段」の意味。この石段を登ると、涅槃とされる本堂に到着することができます。今では車で本堂脇の駐車場まで行ってしまふことがほとんどですが、今回は初心に帰って、久しぶりに菩提梯に挑戦しました。早朝の朝勤に参加することも大切ですが、体を使い息を切らし汗をかいて菩提梯を登ることで、心身の「信」をリフレッシュすることが出来たのではないかと思います。また身延山に私の「信」が「在る」ことを実感することができ、日々の信行が菩提梯を登る日々そのものであることも教えてくれました。

菩提はサンスクリット語のbodhi（ボーディ）の音写です。ボーディはブッドフbudh（目覚める）からつくられた名詞で、真理に対する目覚め、すなわち悟りを表します。仏陀（ブッダ・buddha）は「目覚めた人、覚者」という意味です。つまりお釈迦様を仏陀と呼び仏さまと呼ぶのは彼が真理に目覚めた人だからです。インドでは古来から存する、真理を悟った人の意であり真理の創造者ではありません。本来の意味では仏陀は多数存在することが出来るのです。過去には仏陀と呼ばれた人はジャイナ教の開祖マハービーラなどがいたようですが、今では、お釈迦さまをさす固有名詞のようになっています。しかしここで重要なことは仏陀が真理に目覚めた人であるということであり、真理を創造した人ではないということです。つまり真理は常にここに「在る」のです。ただそれを私たちは観る（目覚める）ことが出来ないままです。唯一の真理に目覚めた人仏陀が観たものは、ありのままの世界です。つまり諸行無常、諸法無我です。それは諸法皆空、つまりすべて存在（色）するものには実体（空）がないという真理です。色即是空、空即是色です。空を有と観てしまうから私たちには「苦」が付きまとうのです。これが一切皆苦です。そして目覚めることが出来れば苦から解放され安らぎの処に辿り着くことが出来るのです。これが涅槃寂靜です。四法印といわれる、「諸行無常、諸法無我、一切皆苦、涅槃寂靜」が仏教の教えの全てです。真理は既に存在しているので、私たちはその真理に目覚めればよいだけです。法華経がすべての人が仏陀になることが出来ることと説いたのは、このことです。真理に目覚めるためには世界をありのままに観ることです。私たちはお釈迦さまから真理に目覚める方法を「教え」として与えられました。「信」だけではただ知識として仏教を理解したに過ぎません。「信」のままに日々を生きることが「行」です。信行が一致して初めて仏教の知識は仏の「智慧」となります。仏陀に完成形も終着もありません。仏の智慧を自分自身に纏うために信行の日々を生き続けることが目覚めた人（仏陀）になり続けることなのです。それが菩提梯を登り続けることなのです。

琉游舎では先日涅槃会の法要を初めて催しました。お釈迦様の亡くなられた日に行う法要です。法要は道場にお迎えした仏さまに、各々の本土にお帰りください、そして常に私たちをお守りくださいと願う「奉送」の声明で終えるのが常でしたが、涅槃会に限っては最後に「七佛通戒偈」を唱えます。「諸悪莫作 諸善奉行 自浄其意 是諸仏教（諸々の悪を作すことなく、諸々の善を行い、自ら其の意を浄くする、これが諸々の仏の教えなり）」これはお釈迦様を含む七人の仏（過去七仏）が共通して説いた教えを一つにまとめたとされている偈です。教えを知識として喧伝してきた自称お釈迦様の弟子たちの言葉と異なり、ここには教えの原点、仏の智慧があります。誰にでも理解し自分の信行に替えられる教えです。菩提梯を登る信行の毎日にこの偈を私の心身に当て続けることのできる日々を願って、私は身延山からの帰途につきました。